

SHIMANE MAGAZINE

Doctor's Career Support / 2022. Winter vol. 13

しまね地域医療支援センター マガジン



©DLE

特集

Feature.01

ここ島根から

日本の医療を変えるべく

「しまね総合診療センター」

スタート！

島根大学医学部附属病院
総合診療医センター

Feature.02

若手指導医に聞きました



島根大学医学部附属病院
眼科

持地 美帆子 先生



松江生協病院
消化器内科

尾上 正樹 先生

Feature.03

私の島根ライフ



隠岐病院
総合診療科

小川 将也 先生

Feature.04

しまねで働く若手医師

Message

椎名 浩昭

しまね総合診療センター
“NEURAL GP Network”

SPECIAL TALK SESSION

センター長

副センター長

白石 吉彦 先生 × 和足 孝之 先生



SPECIAL TALK SESSION

島根大学医学部附属病院総合診療医センター
センター長島根大学医学部附属病院総合診療医センター
副センター長

白石 吉彦 先生 × 和足 孝之 先生

Yoshihiko Shiraishi

Takashi Watari

しまね総合診療センター “NEURAL GP Network”

2021年4月に開設された「しまね総合診療センター」。

ここ島根から日本の医療を変えるべく、新たな取り組みがスタートした。

センターが掲げる目標は、優秀な総合診療医を育成し、島根のすべての地域の医療を支えること。

そのために県内の総合診療医をつなぐネットワークを構築し、次々とプロジェクトが進められている。

今回は、センター長の白石吉彦先生と副センター長の和足孝之先生に、

島根が描く総合診療医の未来について語っていただいた。

白石 吉彦 先生

Yoshihiko Shiraishi

1992年自治医科大学卒業。徳島大学病院、徳島県立中央病院で初期研修。徳島県内の病院、診療所勤務を経て1998年島前診療所（現隠岐広域連立隠岐島前病院）に赴任。2001年より同院院長に就任。2021年島根大学医学部附属病院総合診療医センター長に。

和足 孝之 先生

Takashi Watari

岡山大学医学部卒業。（学士編入）、ハーバード大学医学部大学院MHQS修了。湘南鎌倉総合病院、東京城東病院、マヒドン大学臨床熱帯医学大学院、島根大学卒業臨床研修センターを経て2021年島根大学医学部附属病院総合診療医センター准教授（副センター長）に。

島根県の医療を支える 総合診療医の育成を目指す

和足：しまね総合診療センターの開設から半年経ちましたが、島根県における総合診療医育成プロジェクトはかなり前進したのではないですか。地域が必要とされる総合診療医を育てるためには、ただ大学で講座を開設するだけではだめで、実際に地域医療の現場で臨床に携わっている総合診療医が教育に関わらなければならないと思ってきました。

白石：超高齢化社会においては総合診療医が幅広く診療にあたり、必要に応じて臓器別の専門医が診るのが効率的。しかしどの県でも総合診療医の育成はうまく進んでいないのが実情です。そこで厚生労働省が推進したのが、新たに全国7つの地域で総合診療医センターを開設する計画でした。

和足：島根大学がその候補に挙がっていること知り、「これはチャンスだ」と。これまで描いてきた総合診療医育成のプロジェクトが実現できると思ったのです。

白石：私が和足先生から声をかけられたのが、2020年の11月。それまで隠岐島前病院の院長として20年以上地域医療の現場を見てきたので、いかに島根の離島やへき地で医師が不足しているか実感として分かっています。地域で活躍できる総合診療医を育成しなければならぬという思いはずっとありました。

和足：白石先生の現場力とリーダーシップは、センターとしての戦略を立てるうえで欠かせません。島根の総合診療医の「風土を作る人」ですから。

白石：隠岐島前病院では派遣の先生が1年交代で赴任するのが通常でしたが、私が院長になってから、3年4年と継続してくれる人が増えたくんです。診療を通して地域の問題を考えていくことに、喜びとやりがいを感じてくれたのでしょう。彼らは今、島根県境の小さな病院で頑張っています。

和足：派遣や義務年限ではなく、自ら行きたいと希望してくれたのですね。

白石：ええ。私としてはこれからも彼らを支援していきたい。一人ではできませんが、和足先生がこれまで時間をかけて県内の総合診療の土壌を耕してくれたので、一緒にやってみようかと決断しました。それに私たちがここで動かなければ、島根の総合診療が10年は遅れてしまいますからね。

上下関係や組織の壁がない 成長するネットワーク

白石：今後、開業医の先生方が高齢化で辞めていってしまつと、地域の中核となる50床、100床の病院は総合診療医がいなければやっていけない状況になります。おそらく県内の総合診療医の多くは、そうした危機感を持っていました。

和足：私は、島根の総合診療医の先生方は大きく4つのグループに分かれると分析していました。それぞれに危機感を持ちながらも一つになって動くことができない状況だったのです。連携において大切なのは、目標を達成するためのビジョンを共有すること。そこで、しまね総合診療センターではまず「環境を整えました」。

白石：島根県は東西に200kmと長く、離島もあるので、医師たちが全員が集まるのは難しい。バーチャルオフィスならば、その不利な点を解消できますよね。

和足：COVID-19禍により環境が変化したことで、利点もありました。Zoomでやり取りをすればいいのだと、みんなが気付いてくれたのです。

白石：和足先生と二人でのLINEを使い、県内の総合診療医に声をかけたのが今年の1月頃。今では123人まで登録者が増えました。脳の神経回路のように連携しながらどんどん成長していくネットワーク、それが「EMERALD GP Network」なのです。

和足：そこには上下関係もなく、病院間の垣根がありません。「優秀な総合診療医を育成する」というビジョンのもと、素晴らしい意見はすべて採用します。

白石：だから、アイデアを出した人がプロジェクトリーダーですよ。誰でもやりたいことを言っていいます。

和足：匿名での書き込みもOKですし、普段から自由に発言できるような雰囲気作りを心がけています。実際に若い人たちが参加して活発な議論がなされています。

コアメンバーを中心に 複数のプロジェクトが始動

白石：現在大学で常勤は和足先生だけです。が、123人登録している総合診療医のうちコアメンバーである10人が島根県内の病院に散らばり、プロジェクトを推進しています。私と和足先生はあくまで仕組み作り。に注力し、実務はできる限り他の先生にやってもらうようにと考えています。

和足：コアメンバーの先生は、これまで4つに分かれていたグループからまんべんなく集めていて、それがうまくいった要因です。ね。それぞれが自分の持ち場で孤軍奮闘されてきた先生方。共に総合診療のことを考えられる仲間の存在は大きいと思います。

白石：さらにそのサポートとして、4年目、5年目の若手の先生4人をチーフレジデントに任命しました。「ゴールドの特製バッジが



Yoshihiko Shiraishi

出身地：徳島県
出身高校：徳島県立城北高校
出身大学：自治医科大学（1992年卒）
宝 物：探し中
座右の銘：Smile & Enjoy!

目印です。

和足：研修医や学生たちにとって、チーフレジデントはちょっと上のお兄さん。「ここまでなら自分にもなれるかもしれない」「かつこいいな」と思えるような、部活のキャプテンのような存在です。

白石：彼らが教育の最前線に立ち、例えば医師になってからした失敗をどう振り返っているかなど、厳しい話をしてくれている。朝は何時に起きて、どんなところで患者を診て、休みの日は何をしているのか……。5年目の医師の日常を学生たちは知りたいはずですから。

和足：チーフレジデントを支えるコンシエールの役割は上村祐介先生(出雲市民病院)が務めてくれています。こうした組織の作り方は、ヒエラルキーがないからこそできる。当センターオリジナルですね。

白石：他にはないと思います。それから、総合診療を学びたいという学生たちの希望に応えるために取り入れたのが、ビデオオンデマンド。島根の総合診療医が力を合わせ、2カ月で85本の動画を制作しました。全国、いや世界に向けて無料公開するので、内容のチェックや著作権の問題などをクリアしなければならず、とても大変でした。

和足：ええ。それでも国内の有名講師に頼むのではなく、自分たちで作ることにこだわりましたよね。取り上げる症候の選定にはコメンターの樋口大先生(島根県立中央病院)、上野伸行先生(浜田市国民健康保険あさ

ひ診療所)が尽力してくれました。

白石：動画の良いところは、いつでもどこからでも何度でも見られるところ。学生たちにはとても好評です。今回は学生や初期研修医向けに作りましたが、今後はさらにレベルアップして、総合診療医が現場に出たときに困っていることや、その解決方法を扱っていく予定です。

和足：私たち教育者の負担を軽減できるメリットもありますね。学生実習では5人単位で2週間ごとに回ってくるので、同じ話を20回以上することも。動画を見ておいてもらえば、そのついでに質問に答えたり、さらに深い考察を話したりできるので、教育の質も上がります。

白石：これからも島根から全国へ、新しい総合診療医教育のロールモデルを発信していきたいと考えています。

やりがいを感じながら 自分に合う働き方が見つかる

和足：島根県は総合診療医を専攻する医師の割合が、2年連続で日本一。着実に総合診療医を育成する文化が育まれてきているのを感じます。私はこれまで学生たちに「本当の総合診療医は地域医療の現場にいる」と伝えてきたのですが、センターの開設によってそれを実感してもらえるようになってきました。

白石：そうですね。私は大学にいるのは週2日で、残りの3日は隠岐での診療を続けてい

ます。私がない日は他の総合診療医が日替わりで大学に来て、教育に参画してくれています。学生がいきなり離島やへき地の病院に見学に行くのはハードルが高いですが、大学のオフィスに寄れば、各地域の総合診療医がそこにいる。「じゃあ、来週見に来る？」という話もできますよね。

和足：興味を示してくれた学生たちが、気軽に大学内のオフィスに来てくれるのも嬉しいです。つい最近も、ここで白石先生のレクチャーを受けている学生がいましたね。

白石：そうそう、1年生でも来る人がいます。人が育つには時間がかかるので、私たちが今やっていることの結果が出るのは、おそらく3、4年後。これまでは自分に合う総合診療医のタイプが見つけれない人も少なくなかったと思いますが、島根にこそ活躍できる場があると分かってもらえるようになるはずです。

和足：2022年度には地域医療実習がこれまでの2週間から4週間になるのも、総合診療を知ってもらう良い機会ですね。総合診療医にもさまざまな役割、働き方があるので、そこで自分に合うものを見つけてほしいです。

白石：学生にとって学びが多い実習期間になるように、現在、連携する病院とやり取りしながら細かいプログラムを考えているところです。さらに島根県では、地域医療実習以外でも、学生が興味のある分野について学ぶのを支援する仕組みがあります。そうした制

度もどんどん利用してもらいたいです。

和足：地域に出て、総合診療を実践している医師の姿を見れば、その魅力が分かっただけです。

白石：ええ。その一方で、「へき地や離島で頑張っている医師は素晴らしい」、でも自分には無理だ」というのではだめなんです。その地域の医療を支えて、人々の役に立つ、かつ医師として豊かな人生を送ることができ、それを当たり前にしていきます。

和足：私は専門医機構のメンバーに入っていますが、今が総合診療の過渡期だと思います。まさにこれから。決められたレールがないことに不安を感じる人がいるかもしれませんが、総合診療医は今後、地域で間違いなく求められる存在になります。

白石：なぜみんな総合診療医にならないの?と思うくらい魅力がありますよ。一度味わったら絶対にやめられへん。ぜひそれを知ってほしいですね。



Takashi Watari

出身地：東京生まれ
出身高校：長崎西高
出身大学：岡山大学(2009年卒)、
ハーバード大学大学院(2021年卒)
宝物：奥さんと三人の優しい子供たち
座右の銘：これを知る者は、これを好む者にならず。
これを好む者はこれを楽しむ者にならず。

GP DOCTORS × MESSAGE

しまね総合診療センターに在籍する /

総合診療医“2021年度病院メンバー”からのメッセージ

多角的に診る診療からコーディネート力まで 現代社会に求められる総合診療医

総合診療の魅力は、患者さんの臓器を診るのではなく、患者さんを一人の人間として多角的に診るだけにとどまらず、背景にある家族や地域までまるごと診ることです。総合診療医の役割は、地域や施設によってはさまざまですが、ありふれた慢性期疾患から急性期も含め単に幅広く診療するだけではありません。時には患者さんの病気について臓器別専門医にコンサルテーションしたり、他の医療福祉関係者とコラボレーションして地域包括ケアを実践するなど、コーディネート力が求められるところも大きな魅力です。医療が細分化されてきた現代社会においてこそ、総合診療の必要性を求められていることは間違いないと考えています。

センター勤務
隔週月曜日



隠岐病院
診療部長・産婦人科部長・
地域連携部長

加藤 一郎 先生
Ichiro Kato

医学だけでなく多くの経験を積み 先生方の個性が光る総合診療を

総合診療に対して難しく考える必要はありません。総合診療は地域、施設、関わる人によるオーダーメイドの医療です。医学生、若手医師の皆さんは、できるだけ多くの経験を積んでオーダーメイドできるネタを作ってください。ここでいう経験は医学だけではなく、趣味、地域活動への参加など、医学ではない経験をたくさん積むことが重要です。一見、医学とは関係のない分野の経験が、総合診療を展開する時に役立つことがあります。先生方の個性が光る総合診療を作り上げてみてください。センターでは多くの医学生、若手医師が総合診療に必要な経験値を上げるためのサポートをしています。経験値を積むツールとしてどんどんセンターを利用してください。

センター勤務
隔週月曜日



隠岐病院
副診療部長

小田川 誠治 先生
Seiji Odagawa

センターのさまざまな取り組みを通して 島根全体の医療がより良いものになるように

しまね総合診療センターが発足して6カ月が経ちました。現在はセンターが素敵なオープンカフェ風のスペースとなり、総合診療や地域医療に興味のある医学生さんや研修医が集い、直接地域で働いている医師から話を聞いたり、アドバイスが受けられる環境となっています。センターができたことでより身近に地域のことを聞ける場所ができたのは本当に羨ましい限りです。他にも学生さんや地域で働く医師のため、何より地域の患者さんのために、島根全体の医療がより良いものになるように、センターはさまざまな取り組みをしています。その取り組みに興味のある学生さんや研修医・専攻医・指導医が参加し、回を重ねるごとに盛り上がりが増している印象です。

センター勤務
毎週水曜日



浜田市国民健康保険
あさひ診療所
所長

上野 伸行 先生
Nobuyuki Ueno

総合診療のモデルケースとして 島根が日本を牽引する未来を

高齢化が著しい島根県では、合併症の多い高齢者に全対応する総合診療医が求められています。しかし松江と出雲以外は医師不足が深刻であり、特に総合診療医の不足が目立ちます。そこで、私たちは島根の総合診療医を増やすために、対面とvirtual空間での医学生教育を行ってきました。まず、総合診療医のネットワークを構築するとともに、センターに地域の総合診療医を常駐し、教育体制を作りました。地域の総合診療医を大学の教育に組み入れ、指導不足を解消して学ぶ場を作り続けてきたことで、総合診療を学びたいという意見が出てきています。今後、島根の総合診療医不足は解消に向かい、今の医学生が総合診療のモデルケースとして、日本を牽引することが期待できます。

センター勤務
毎週水曜日



町立奥出雲病院
総合診療科部長

遠藤 健史 先生
Takeshi Endo

About しまね総合診療センター “NEURAL GP Network”

島根県の「総合診療医養成プロジェクト」の取り組みを紹介を紹介します！

しまね総合診療センター



未来展望と目標

① 総合診療専攻医割合の日本一を継続『島根を総合診療の聖地へ！』

総合診療を専攻する医師の割合が2年連続日本一の島根県。2024年までに県内における総合診療専攻医10名の達成を目指している。総合診療専攻医の割合も、2021年の11.4%から22%まで上げるのが目標だ。大学と県内の医療機関が連携し、充実した総合診療研修のプログラム作りにも取り組んでいる。

② 総合診療領域の研究（論文数）で島根県が日本を牽引！

しまね総合診療センターの国際協力機関として、総合診療医学研究で世界をリードするアメリカのハーバード大学医学部ペスイスラエルメディカルセンター、スウェーデンのルンド大学医学部プライマリーヘルスケア研究センターとの連携を図っている。「臨床・教育・研究」の3本柱で日本を牽引するロールモデルを目指していく。

③ へき地・離島に実力ある総合診療医を供給継続！

しまね総合診療センターがミッションとして掲げるのは、へき地、離島を含むすべての地域の住民が安心して過ごせるよう優秀な総合診療医を育成し、持続可能な医療を提供し続けること。総合診療医のさまざまな働き方のロールモデルを展開しながら、若手医師の新しい働き方を提案する。

しまね総合診療センターの今後の展開は **SHIMANE MAGAZINE** でレポート！

Q チーフレジデントとしての活動は？

A 若手医師にとって「ご縁」が繋がるように活動しています。研修医や医学生と症例を中心に学び合う機会を設け、経験から学んだ症例を所属する医療機関とは異なる若手医師とオンライン上で共有し議論することで、生涯学習の重要性を提供しようと活動しています。



チーフレジデント
坂口 公太先生
島根県立中央病院

Q コンシェルジュとしての抱負は？

A 総合診療に興味を持っていただいている方に適切に情報を届けること、多様性のあるキャリア支援（頑張る人も、自分のペースでやる人も、子育てにしっかり関わりたい人も、趣味に生きたい人も）、相手の価値観を尊重した対話を大事にしています。



コンシェルジュ
上村 祐介先生
出雲市民病院

しまね総合診療センターを
支える若手スタッフに聞きました

KEY PERSON

×

ANSWER

センターの
取り組み

01

島根発、地域医療の現場と大学を結ぶ Teal 型組織構造

県内の総合診療専門医が連携ネットワークでつながる

Teal 型組織とは、組織を1つの生命体として捉え、目的のために組織の形や構成を自在に変えながら進化し続ける組織構造のこと。リーダーのトップダウンで動くのではなく、メンバーひとりが意思決定をしている。同センターが立ち上げた「NEURAL GP Network」には、現在123名の総合診療医が参加。上下関係や所属する組織の垣根を超えて緊密な連携を取っている。当センターは地域の医療現場と大学を結び、良質な総合診療医を養成していく。



センターの
取り組み

02

IT を駆使した バーチャルオフィスの構築

これまで医師たちが一同に介するのが難しかった島根県の地理的条件、交通の利便性の問題をクリアするため、Redmine、Slack、Google アプリア、Dropbox、Zoom……、などを備えたバーチャルオフィスを構築。月2回はコアメンバーでWebミーティングを開催しているほか、各プロジェクトの進捗状況は常にメンバー間で共有されている。

センターの
取り組み

03

総合診療の教育ビデオコンテンツ 85本を全国に無料公開 ※2021年12月現在

島根県オリジナルの総合診療教育のビデオコンテンツを制作。無料公開しているのは国立大学では全国初。総合診療では肺や心臓などの臓器を診るのではなく、胸痛といったような症状に対して診断するのが基本。何を見落としてはいけないのか、頻度の高い疾患は何か、そのために必要な検査は何か。総合診療に必要な症候を厳選し、動画にまとめられている。

その他にも同センターのホームページでは、ロールモデルとして県内の総合診療医を紹介する「GP Stories」や、論文について解説する「GP Research」、学生による「GP student」など、多彩なコンテンツが掲載されている。

現在、さらに 40本の
Advanced Video を作成中



Hospital Data

島根大学医学部附属病院総合診療医センター

〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1 1 階 2 F

TEL : 0853-20-2217 E-Mail : shimanegp@gmail.com

NEURAL GP Network
島根県発・総合診療医養成プロジェクト
<https://shimanegp.com>



Q 総合診療医を目指したきっかけは？

A 高校時代に出会った開業医の先生ご夫婦の存在が大きかったと思います。お話を伺ったり、近所の患者さんとのやり取りをみる中で、自分もこんな風になれたらなと思っていました。チーフレジデントとして仲間、つながりを大事にしていきたいです。



チーフレジデント
原田 愛子 先生
島根県立中央病院

Q しまね総合診療センターはどんな環境？

A 僕は実家が小さな町で診療所をしており、その土地の医療に貢献しようと考えたときに総合診療の力、その患者さんの生活背景にまで介入する力が必要だと感じました。ここは先輩医師のサポートや同期、後輩とも連携を取りながら総合診療医として成長できる環境だと思います。



チーフレジデント
波多野 拓也 先生
益田赤十字病院

Q 島根県で総合診療医を目指すメリットは？

A 島根の地域にはまだまだ問題が山積みで、総合診療医のニーズは高く、活躍の場が多いです。島根出身の僕が言うのもなんですが、島根の人はいい人ばかりです。患者さんと深く関わっていく中で、いつも心が洗われます。



チーフレジデント
小川 将也 先生
隠岐病院

P13.「私の島根ライフ」でも紹介！



本土からフェリーで2時間半、高速船で約1時間の場所にある隠岐の島。今回ご紹介するのは、島の医療を支える隠岐病院に勤務して3年目になる小川将也先生です。「その土地を知り、その土地を好きになると、地域医療はもっともっと輝いて見えます!」という先生の言葉通り、仕事もプライベートも思い切り楽しむ、充実した日々の様子が伝わってきました。



隠岐病院

小川 将也 先生

Masaya Ogawa

島根県浜田市出身

浜田高校卒業

自治医科大学卒業 (2017年)

 隠岐病院

私の島根ライフ

小川 将也

DOCTOR LIFE in SHIMANE



オフの充実で 診療が楽しくなる

私が隠岐病院にきたのは3年前。すっかり島での暮らしにも慣れ、地元の人と船に乗って落りに行ったり、稲刈りをしたりとプライベートでもアクティブに活動しています。そうしたオフの過ごし方はリフレッシュになるだけでなく、普段の診療にも大きく影響していると感じます。例えば、海に潜っていつどのタイミングで鼓膜穿孔するのか、赤バイ貝による中毒やチャドクガによる接触性皮膚炎など、島ならではの疾患やケガなどを知るきっかけにもなっているのです。

私自身、素潜りを始めてから、外来に来る漁師さんたちがみんな師匠に見えるように……(笑)。島に来たばかりの頃は、「コレステロールが高いので運動してくださいね」とどこか上から目線で指導してしまっていたのが、島の方と同じ目線に立てるように

なったことで、共感しながら診療できるよになりました。妻も同じ総合診療科の医師ですが、子どもと一緒に散歩をしていると、近所の方がお茶に呼んでくれることがよくあります。プライベートが充実するほど、患者さんとの距離が縮まっています。



島での経験が 一生の思い出に

地域医療研修に来る先生たちは、事前にリモートで面談をしています。隠岐病院でどんなことを学んでほしいのかを伝えると同時に、ここでどんな研修を受けたのか、必ずニーズを聞くようになっています。また、病院スタッフ全員で研修医を迎えたいので、研修医には簡単な自己PRのスライドを作ってもらい、それをスタッフで共有します。事前情報があれば、実際に病院で会ったときに自然と話が盛り上がります。だから、島に来て寂しい思いをすることははずです。



素潜り、釣り、キャンプ…と、大自然を満喫できます。研修医や学生たちを連れてサザエを獲りに行き、BBQするのが定番



隠岐の島の好きな場所は？
「海！海！海！！」



隠岐の島の好きな食べ物は？
「志母うどんの岩のりのしゃぶしゃぶ、岩牡蠣、松葉蟹」

大事にしているのはオフの時間。せっかく島に来たからには、「一生忘れられないくらいこの土地を楽しんで帰ってもらおうようにします。地域医療は楽しくなくては続けられません。だからこそ、私たちが楽しんでいられる姿もしっかりと見せていきたい。研修が終わってから、「また来ました！」と毎年遊びに来てくれる人もいて、それがとても嬉しいです。

隠岐の島を一言で表すと？

「仕事もプライベートも充実した最強の島」



お米の収穫を手伝ったりトレイルランの大会に参加したり、地域ならではの体験ができます

自分の目標を 見つける研修を

研修医の皆さんの中には、「早く専門分野を決めなければ」と思っている人もいるのではないのでしょうか。私の場合は、あらかじめ専門分野を決めていたわけではなく、隠岐の島の地域医療を考え、総合診療を実践していく中で、やりがいを感じるようになりました。

まず、自分がどんな医療を目指すのかは、この先何十年の医師人生を決める大事な決断です。焦って決めてしまっても構いません。もしまだやりたいことが決まらないのであれば、それを探するためのモラトリアム期間があってもよいと思います。

離島のような医療資源の乏しい地域でこそ、専門医の力が求められています。例えば、内視鏡治療に精通した医師がいれば、ここで早期がんの治療や止血の処置ができる。一人の医師が持つ技術によって、地域の医療が大きく変わります。それがイメージできると、自分がどんな医師を目指していきたいのかが見えてくるのではないのでしょうか。



総合診療医のチーフレジデントとして、研修医の教育には力を入れています

Hospital Data

隠岐広域連立 隠岐病院 〒685-0016 島根県隠岐郡隠岐の島町城北町355 TEL : 08512-2-1356 HP : <https://www.oki-hospital.com/>